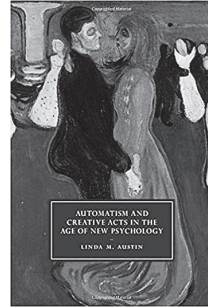


書 評

Linda M. Austin, *Automatism and Creative Acts in the Age of New Psychology*
(Cambridge: Cambridge University Press, 2018)

小野 俊太郎



本書は、Linda M. Austin が、*Ruskin 論* (*The Practical Ruskin*)、*Nostalgia 論* (*Nostalgia in Transition*) に続いて執筆した3冊目の著書となる。1冊目ではJohn Ruskinの文学論を含めた多彩な著作から、彼の考える“economy”のモデルを構築してみせた。2冊目は本書と扱う時期が重なるが、Thomas HardyやEmily Brontëなどの文学作品を中心に“nostalgia”の変遷を論じている。そして、3冊目の本書は、“automatism”の19世紀から20世紀への変遷を扱うが、自伝、旅行記、写真術、小説、バレエと取り扱うジャンルが拡大している。広範囲な資料をもとに、それらを貫く一つの主題を論じるのがAustinの手法となる。

題名にあるautomatismは、もともと自分の意志では身体を統御できない夢遊病のような状況を指していた。夢遊病はCollinsやDickensが小説の題材とし、*Dracula*のような吸血鬼を通じて、ゾンビにまでイメージが連なっている。そして、Austinは対象のジャンルを拡張して、写真術や自動書記や人形振りをするバレエなどの機械的な現象とautomatismの関係を創造の観点から考えている。そこで鍵となったのは、19世紀に台頭した「新しい心理学」である。意識的なものではない機械的な「反応」や「反射」に注目し、それが芸術的な創造性につながることを論じている。

出発点となったのは、Stanley Cavellが「あるメディアの創造とは、あるオートマティズムの創造である」と述べたことだった (p. 4)。Austinは、Cavellの映画に関する言及が他のメディアにも適用できると理解して、写真、自動書記による文章、バレエなどを対象としたのである。そして近年盛り上がりを見せる「ポストヒューマニズム論」などを踏まえ、Brian

Massumiたちの議論も参照し、大きく mentalist と physiologist の対立と相互関係のなかで文化現象を読み解いていく。

本書の第1部は“Automata-Phobia”と題されている。第1章の“J. S. Mill: Genius-Automaton”では、J. S. Millの自伝の草稿と刊本までの変移を扱う。父親のJames MillがAssociationismに基づく厳格な英才教育をほどこし、その結果本人はシステム化された記憶や論理能力を手に入れた。そのため一種の「機械」とみなされたのだが、妻の死などによって、それまでの“affectless”の状態から“emotion”を見出すところが興味深い(p. 39)。Austinは、Millが父親の呪縛から逃れたこととAssociationismからの離脱を並列し、題材となった*Autobiography* (1873)の“auto”の意味を問い直している。

第2章の“Automatic Aesthetics and the Shame of Tourism”では、Richard JefferiesとJohn Davidsonの旅行記を取りあげている。19世紀において、彼らのような中産階級の人間が風景の「目利き」とされ、travelerとtouristを対比させて後者を価値あるとみなす美学を提唱したのは、18世紀にgrand tourをした貴族たちの模倣にすぎなかった。その点を自覚する“touristic shame”が含まれていた、とAustinは指摘する。ところが、19世紀末の旅行案内書により、文学作品などをお手本とした「芸術写真」を見て旅行をする大衆が登場すると、自分たちが風景を観る際の美学的な枠がカメラによって作られた過去など忘れてしまっている。これがまさに美学のautomatismだった。

第2部は“Technologies of the Automatic: Process and Movement”と題されて、写真、文学作品、バレエといったジャンルを取り上げている。第3章の“Photography’s Automatisms”では、1840年代に始まった写真術の発展によって、写真がもつ“latency”が注目された経緯が述べられている。興味深い例として、動物と人間の表情に関するDarwinの著作に引用された“terror”という表情のイラストがある。元となった写真の表情は、三本の電極によって人工的に作り出された“terror”だった。それが文脈を越えて借用されたのである(p. 102)。そこでは写真がもつ瞬間を写し出す誠実さと、イラストがもつ典型性とが交差していた。

第4章の“Automatic Writing and Physiologies of Creativity”は、文学作

品を扱っている。George Gissing の *New Grub Street* (1891) で、登場人物の Marian が文学機械の議論を述べているのは、先駆として Babbage の差分機関があったとする (p. 135)。さらにこの小説に熱力学的なモデルがあると読み込むのだ。小説が才能ある者にとっての特権的なジャンルではなくなり、大量に文章を書くことは、小説家、学者、ジャーナリスト、事務員に共通する課題となった。さらに心霊術における Swedenborg の「霊言」などが、シュルレアリスムの自動書記へとつながることが示される。ただし、自動書記の議論は、結局 Associationism へと回帰して、偶然の組み合わせによる妄言とみなされる可能性があった。そこで自動書記を才能ととらえて芸術的に評価する新しい見方が登場したのである。

第5章の “The Automata Ballets” は、身体の動きをめぐるもので、本書でいちばん興味深い章である。本書は、第1章で自伝における記憶と感情の関係、第2章で旅行体験と美学の関係、第3章でカメラという媒体の誠実さ、第4章で文字を書くという行為がどこまで自覚的なものかを扱ってきた。第5章はバレエという身体表現そのものが対象となる。機械的な動きで踊るように身体の訓練をした上で、故意に人形を模倣する点に新しい可能性を見出したのだ。ここでは *Coppelia* (1870) と *Petrouchka* (1911) が取り上げられた。古典的なバレエが機械的で非人間的とされていた状況を批判して乗り越えた作品だと両者を評価し、とりわけ人間が演じる人形の *Petrouchka* を人工物としてのポストヒューマンとみなすのである。

新しい心理学が台頭した1880年代における人間の機械化と機械の人間化の関係は、都市生活や労働の現場に現れた。それを示したのが Arthur Conan Doyle の *The Sign of the Four* (1890) である。Dr. Watson は Holmes を “automaton” と呼ぶ。「冷血漢」といったニュアンスで、さらに「計算機械」とも批判されるのだが、Holmes が Mill 並みの才能の持ち主であるのは間違いないし、感情や愛情の示し方もやはり独特である。Doyle は写真術を親友の W. K. Burton に教わり、撮影旅行で訪れた場所は、後に *The Hound of the Baskervilles* (1902) の舞台となった。機械的に写した写真がもつ “latency” は、現場に潜んでいるものを見抜く Holmes の推理力と関係してくる。妖精写真も含め心霊術や自動書記は Doyle 本人と密接につながる。有名な “dancing men” を automaton ballet と結びつける視点もありえるかも

しれない。19世紀から20世紀への文化の連続性と転換を考えると、モダニズム文学を準備したDoyleとその作品は重要なはずで、Austinがどうして言及しなかったのかが不思議に思えるほどである。

全体を通じてAustinは、芸術家たちがAssociationismの呪縛や回帰の動きを利用しつつも抵抗しているようすを読み取っている。そしてThorstein Veblenが指摘した「機械の操作原理と生理的身体の操作原理の結びつき」(p. 4)に注目し、芸術的な創造性に限定して議論を進めてきた。ソ連のmachine balletは「個人が国家や組立ラインの犠牲者となる」とされる(p. 209)。それと反する創造的なものを*Petrouchka*のようなautomaton balletに見出している。わざわざVeblenの名前を挙げているので、組織論や経営学史の文脈でautomatismを捉え直せそうである。しかも、Austinの研究はRuskinの経済理論の検討から始まったわけで、本書におけるautomataやautomatismをより大きな文脈で考えると、経済史家のPhilip Mirowskiによる*Machine Dreams: Economics Becomes a Cyborg Science* (2001)の議論と接合できそうだ。20世紀の経済理論と軍事との関係を扱った本だが、新しい芸術表現とは結びつかない凡庸なautomatismが社会に大量に存在する経緯がわかる。

本書を読んでいくうちに、19世紀後半における旅行記や写真など幅広いジャンルに関心が広がり、Associationismやpicturesqueという、古いと思える考え方が今も力を発揮している理由も了解できる。Associationismはコンピューターが既存のデータを機械学習することでニュースや文章を作り出すことと関連するし、picturesqueは旅行や写真と結びついて「インスタ映え」として私たちにおなじみである。本書は、そうした現象に潜むautomatismを照らし出す際に、さまざまな示唆を与えてくれる本となるだろう。

文献

Linda M. Austin. *The Practical Ruskin*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press. 1991.

Linda M. Austin. *Nostalgia in Transition, 1780–1917*. Charlottesville: University of

Virginia Press. 2007.

Arthur Conan Doyle. *The Sign of the Four*. Oxford: Oxford University Press. 1993.

Philip Mirowski. *Machine Dreams: Economics Becomes a Cyborg Science*. Cambridge: Cambridge University Press. 2001.

小野俊太郎『快読 ホームズの『四つの署名』』東京：小鳥遊書房 2019年

——成蹊大学非常勤講師